

## 大野市六呂師高原の空間形成に関する考察\* （“ふくい PHOENIX プロジェクト” 観光文化研究軸活動報告（1））

下川 勇<sup>\*1</sup>, 清水 俊貴<sup>\*2</sup>

### A Study on the Space Formation of Rokuroshi Plateau in Ono City (Activity Report of Tourism-Culture Research axis in "Fukui PHOENIX Project" (1))

Isamu SHIMOKAWA<sup>\*1</sup> and Toshitaka SHIMIZU

<sup>\*1</sup> Faculty of Engineering, Department of Architecture and Civil Engineering

This report discusses the nature of the space in Rokuroshi plateau, which is necessary for practicing the formation of space in Rokuroshi plateau. Rokuroshi Plateau is a space that holds the natural environment as a plateau. In order to use this space, it is necessary to create a way of facing nature. In addition, because this space is confronted with the rage of nature, it is necessary to take steps to protect it from the rage. In this report, the grounds for using hammocks as a method of using the space of Rokuroshi Plateau are summarized.

**Key Words** : Rokuroshi Plateau, Spatiality, Space being Experienced, Protection, Hammock

#### 1. はじめに

本報告は、文部科学省私立大学研究ブランディング事業、『宇宙』事業推進のために地域と協働する“ふくい PHOENIX プロジェクト”観光文化研究軸の取組みとして、大野市六呂師高原の星空観光に向けた2018年度の活動について報告するものである。本事業は5つのプロジェクトにより構成されており、同軸研究メンバーがそれぞれの専門において担当箇所が定められているため、本報告では筆者らが担当する六呂師高原の空間形成に関するプロジェクトの内容に限って報告するものとする。しかしながら本事業は5つのプロジェクトが総合されて完結する特性上、まずはその5つを紹介したうえで、本報告の主旨を通したい。

本報告は二部構成とする。第一部は本稿であり、活動の前提として六呂師高原の空間形成に関する考え方をまとめる。別稿の第二部は、「大野市六呂師高原ミルク工房奥越前での「星空ハンモック」活動について」と題して本稿の考察にもとづいておこなった活動についてまとめるものとする。

#### 2. 六呂師高原の星空観光化を目指す5つのプロジェクト

六呂師高原は福井県内随一の星空の美しさを誇っている。福井県自然保護センターが保有する大型望遠鏡やプラネタリウム、または付随する天体観測会等の企画が示すように、六呂師高原と星空の関係性は以前より定着していたといえるが、観光市場に参入する仕組みは未成立であった。

六呂師高原を対象地として定めることは与条件によるが、観光の市場原理にもとづいて星空観光を成立させる必要性から、次の内容を企画し、大野市と観光誘客施設「ミルク工房」と連携して実践することとした。

##### （1）高原という場の空間形成

高地の雄大な風景をもつ六呂師高原において星空観望者の目的地となる視点場の形成は重要である。美しい星

---

\* 原稿受付 2019年3月29日

<sup>\*1</sup> 工学部 建築土木工学科

<sup>\*2</sup> 工学部 建築土木工学科

E-mail: shimokawa@fukui-ut.ac.jp

の見せ方は空間の構成者の意図するところとなるが、夜間の安全性と利便性を考慮して、公共の誘客施設「ミルク工房」を視点場の拠点として再構成し、誘客拡大も目指して、イベントを定期的に開催する。

（2）滞在時間の延長を狙った飲食の充実

観光誘客のための重要な要素として飲食があげられる。近年の観光ニーズは郷土料理を代表とする地産のメニューが中心となっている。ミルク工房では健康を意識したオーガニックの食材として高原が強調されており、ジャージー牛、高原野菜を使用したメニューが展開されている。また、奥越高原牧場で採取された生乳を加工したソフトクリームでも特徴を打ち出している。本プロジェクトでは、郷土色をさらに高める目的で、六呂師高原としての必然性と独自性があらわれるメニューづくりを企画する。

（3）誘客の仕組みとして SNS を活用した情報発信

六呂師高原の星空の魅力は、関係者の自己満足ではなく、広く一般にも共有できるポテンシャルを持っている。「六呂師高原の星空」というイメージを形成するのは単に星空だけではなく、（1）の視点場形成も含めてのイメージ形成であるため、星空とそれに関連する取組みを総合的に伝達できる情報コンテンツの作成ならびに発信ツールの開発に取り組む。

（4）主要交通網からの二次交通の方法を企画

観光誘客の基本条件に交通の利便性があげられる。六呂師高原へのアクセスは基本的には自家用車もしくは観光バスとなる。JR 越前大野駅から車で 20 分はかかるため、徒歩での入山は難しい。現在のところ北陸新幹線開業との関連性は薄弱であるため、独自の交通システムの構築が急がれる状況にある。

（5）上記の条件を経済指標で支える仕組みづくり

所謂まちづくりにおいて、あることを取組むことは「人・もの・こと」を結び付けることで可能となる。しかし、その取組みの効果性・持続性に眼差しを向けるとき、それを支えているのはマンパワーと経済であることに気づく。まちづくり的取組みが経済的視点を有することは、社会的に効果のある事業として持続的運営を可能にするということである。このことから本事業では（1）から（4）の取組みを総括的に評価することを試みる。

### 3. 六呂師高原の空間性に関する考察

本報告は六呂師高原における星空観光の成立に向けたプロジェクトのひとつである「高原という場の空間形成」に関する報告である。空間形成とはいかにして空間が「つくられた」のか、という創作行為のことである。主体は高原としての六呂師高原であり、その高原としての空間となる。高原としての空間は、街中の空間とは異なり人為的計画がとどかない空間すなわち人々の生活から離れた空間であり、そのため自然の猛威から人々を庇護する空間性をもっていない空間である。このような一種特殊な空間が形成されるにあたっては、その空間の現状が把握されるとともに、その空間の空間性への理解が求められるべきである。

#### 3-1. 六呂師高原の現状理解

高原は高地にある台地であり、人の手が入っていない原始の風景をイメージする。実際、六呂師高原は県立自然公園に指定された標高 400～700m の高地であり、街中の広場や公園のように人為的開発が遠ざけられた風景を保有している。

高原は自然とも謂われる。この自然は世界とも解されるが、あえて限定的に地形に樹木や芝生が生育する環境として見ると、我々はこうした高原を形成する諸要素の集合である自然から受動されつつ能動するものであるから、自然から与えられるとともに自然をつくり変えていくことで、人はそこに居場所を形成する。この意味では、六呂師高原が人の居ることのできる空間として再構成される際、当然の成り行きである行為自体が問われるのではなく、行為の質が問われるべきこととなる。

そもそも高原は、道があることによって認知され、空間として活用されることになる。空間として活用されるべくして天文台を有する自然保護センター、観光誘客施設「ミルク工房」、温泉施設、宿泊施設、大きなアスファルトの駐車場、かつてはスキー場の施設等々が立地することになった。高原という台地は空間であり、その空間性は地球の自然環境の一部として、そして高原の風景（客観としても心象としても）としてあるはずであった。しかしながら活用という経済性をとまう行為は、地球の自然環境に対して自然を減少させるとともに高原の風

景を貶める数々の人為的行為（施設の素材・デザイン・立地の必然性）を誘発し、環境として、そして風景として不調和という結果を導いてしまった。これが六呂師高原の在り方からみた、行為の質としての結果といえる。この観点は高原という存在の在り方を見つめた際に認められるものであるが、例えば天文台といった一部の創造性は高原の特性を活かした用途になっていることも認めなければならない。高原という特徴的な空間を人が何らかの仕方で活用したいと考えるとき、用途の複合化が進むことによって、その進んだ先にあるものが、存在の在り方から乖離することもまた、あるということである。

### 3-2. 六呂師高原の空間性

前節において行為の質として六呂師高原の現状を捉えたが、この現状は六呂師高原の結果としての空間形成の状態となる。そのような空間において我々は星空を観望する体験の場を提供しようとするわけであるが、そのような空間はどのようにあるべきだろうか。

空間への議論は空間を実在と定めたピタゴラス（Pythagorās, BC582-BC496）に端を発し、プラトン（Plátōn, BC427-BC347）は空間を質量の同一性とし、対してアリストテレス（Aristotélēs, BC384-BC322）は空間を身体間の関係として空間の関係性という考え方を導いた。近代ではデカルト（René Descartes, 1596-1650）が空間と物質とを同一視し、それに対してニュートン（Isaac Newton, 1643-1727）は物体の運動を根拠として空間と物質を切り離した。これに近い発想としてライプニッツ（Gottfried Wilhelm Leibniz, 1646-1716）は空間を事物間の相対として序列化するにいたった。一方で空間の思想分野ではカント（1724-1804）がア・プリオリによる超越論を基礎としながら空間の絶対性を経験の産物とし、人に備わった不変的な感性の形式とした。またアインシュタイン（Albert Einstein, 1879-1955）は空間と物体の独立を否定し、空間を物体との相互規定的関係にあると見なした。

このように高名な学者たちがそれぞれの分野において空間を論じていることは、空間が単なる語彙ではなく、世界にとって意味をもった現象であることを示している。空間への理解はそれほど重要な課題なのである。本稿では六呂師高原の利用を念頭に、空間に関する歴史的解釈を遡及しながら人を中心に空間を論じたボルノウ（Otto Friedrich Bollnow, 1903-1991）の「体験されている空間」を拠り所としたい。

ボルノウは空間を人間存在の成立を支える基本形式と捉え、「人間の具体的生活にたいして開き示されるままの空間」<sup>(1)</sup>と示した。これはベルグソン（Henri-Louis Bergson, 1859-1941）がとった現存在<sup>(2)</sup>の存在様態として数学や物理学があつかう均質的な抽象空間（測定できる空間）ではなく、身体の向き・位置によって空間に意味的な優越がつけられる空間である。ボルノウが解釈の誤解を避けるために精神的な空間ではなく想像上の空間でもなく「現実的な具体的空間」<sup>(3)</sup>と強調している空間である。

ボルノウの特徴が最も表れているのは「空間はけっして人間に対して中立な、つねに同じものとして存続する媒体ではない」<sup>(4)</sup>という考え方である。これは人の生活の仕方によって空間の立ち現れ方が異なるという意味であり、それをボルノウは「具体的空間」とよんでいる。この具体的空間は、いうなれば人の空間へのかかわり方（体験されている空間）が、空間への問いの本質になることを示している。

この体験されている空間は、人を中心として関連づけられる（アリストテレスの空間論的）空間であり、人は空間に内在しているという状態にあるため、どのように空間内に存在しているのかが問われる。ボルノウは「いささか手あらひ仕方で自分にとっては未知の媒体のなかへもちこまれている」<sup>(5)</sup>と表現し、人が空間の中に無造作にもしくは偶然に投げ出される様態を空間が持っているとする。そして、この人と空間の関係に対してボルノウは「そこで、しかし人間はまず住まうことを学ばなければならない、というのは、投げ出されているという、おそらくは不可避の、しかしいずれにせよ災いに満ちた成長の過程でふみこんでしまった状態を、人間は、自分の努力で住まうという状態に変換させなくてはならないというふうにまさに理解されるのである」<sup>(6)</sup>と結論づける。この「住まうこと」、「住まうという状態」とは、一先ずバachelard（Gaston Bachelard, 1884-1962）のいう世界という不安から身を守る家、すなわち「ゆりかご」という庇護のなかにいること、その状態を指すとしておきたい<sup>(7)</sup>。

さて、こうしたボルノウの空間に対する理解を六呂師高原の空間としてみると、高地の広大な自然空間という一般的な見方から、そこが我々を中心とした「体験されている空間」として、人と空間との相互関係の舞台が六呂師高原であるという見方に変化する。人は六呂師高原という未知の空間に投げ出され、いずれはその空間を自

分のものとするだろうが、その過程で、高地の大草原には自然の猛威を回避する「家」がないため、自らの努力で安心できる庇護の空間をつくりだし、安定的に定位するのである<sup>(8)</sup>。

#### 4. 六呂師高原の空間形成の方法に関する考察

「体験されている空間」を通じて空間について触れ、六呂師高原の空間へと結んだわけであるが、この空間についての議論はさらに深められ、本質へと眼差しが向けられるべきである。しかし、こうした議論が辿ってきた結末は、さらに議論の深まりを求める思索の連鎖を生み、方法へと帰着することは稀であった（医療分野では精神分析の方法を確立しているが）。我々がここで求めていることは、六呂師高原の空間をどのように活用するかであり、空間への眼差しは方法へと向かわなければならない。その際、人が空間において創作する行為、つまり先に述べられた「庇護の空間」から着想をえて、その庇護性を具象化する方法を検討することとした。結論から述べると、筆者らはハンモックという道具を用いて六呂師高原に庇護性をもたらすことを考えた。このハンモックによる活動内容については第二部に譲ることとするが、ハンモックという道具性（あるいはハイデガー（Martin Heidegger, 1889-1976）の適所性<sup>(9)</sup>）について触れておきたい。

ハンモックは「横たわる」ことの機能をもった道具である。ハンマーは「たたく」ことの、コップは「水をいれる」ことの道具性と同じである。またハンモックは「つつまれる」という効果を人に与える。このことから「横たわる」ことを目的として「つつまれる」という効果を派生させる道具的機能であるといえる。これはハンモックが「つつまれる」ことを内包した道具であることを意味している。我々はこの「つつまれる」という庇護につながる効果に着目した。人は「横たわる」行為の先に、いやあるいはそれ以前に経験的に「つつまれる」行為を求めて（ハイデガーの適所性の概念に倣うと、ハンモックは人をつつむことによって適所を得るとなる）、六呂師高原という広大であるがゆえに定位しがたい空間において、自らの居場所を定め、安心できる空間として了解するのである。

また「横たわる」は、人の「視線を上方に固定する」という派生効果を生む。ハンモックは「視線を上方に固定する」ことを内在させた道具的機能といえる。この上方への視線の固定化は、我々が求める星空観望にとって有効である。星の観望を求めている人にとっては経験的に「視線を上方に固定する」道具的機能をもつハンモックに定位される（ボルノウの「具体的空間」）ことになる。

#### 5. まとめ

六呂師高原の空間性に関する考察、六呂師高原の空間形成の方法に関する考察を順におこなった。六呂師高原は生活圏から離れた高原として自然の諸要素によってのみ構成される存在様態が本来的であったが、人の手が入ることによって変化していった。創作行為の質として自然環境を保全するアセスメントも勿論であるが、景観形成計画への配慮が必要であった。

そもそも、空間は人にとって未知の世界に投げだされる受け皿である。こと高原ともなれば、受け皿としての空間は自然の表情（優しさ／厳しさ）に直接的に接する空間となる。如何なる人にとっても平等な物理的空間であるが、この自然の表情は人の生活の仕方によって現れ方が異なる。気持ちが晴々しい人には自然もそれに応えてくれるものである。しかしながら人は自然の猛威を予測し、常に身を守る居場所を持ち合わせていなければならない。それは「住まうこと」である。庇護の空間である「住まうこと」を通じて人は自然と向かい合うことができるのである。高原の空間は「住まうこと」を獲得することによって人の居場所になりえるのである。

筆者らの計画は人の居場所をハンモックによって実現できないかという取組みである。自然環境への負荷を最小限にするためには行為としては空間に固定化しない仮設が相応しく、前提となる星空観望としては上方への姿勢の固定、そして空間性としては庇護性への配慮となる。

以上、本計画のコンセプトを簡略化して示すと次のようになる。

ハンモックを六呂師高原に用いることで、人は「横たわる」経験、「つつまれる」経験、「上方に視線を固定する」経験をする。人はこの経験によって六呂師高原という環境（世界）を了解し、利用できる自己の居場所として再構築する。これを経験的に了解している人は、六呂師高原にハンモックがあることで、生活の様式が異なろうとも、それを自己の定位とすることが可能になる。

## 謝 辞

本事業は文部科学省私立大学研究ブランディング事業として実施されている。本事業の実施にあたり大野市職員の遍照誓応様ならびにミルク工房の中村圭吾オーナーには多大なるご尽力を賜った。また本学社会連携推進課江藤浩一課長には職務を超えた数々の応援を賜った。皆様に感謝の意を表する。

## 文 献

- (1) オットー・F・ボルノウ『人間と空間』、大塚恵一訳、せりか書房、1978年、P.17.
- (2) ベルグソンの意味する現存在はハイデガーと比較することで明確になる。ベルグソンとハイデガーによる現存在の解釈は、事実をありのまま捉える態度は同様であるが、そのありのままの事象の取り扱いが異なる。両者の現存在に関する比較を行った論文（戸島貴代志『創造と想起—可能的ベルクソニズム—』、大阪大学学位論文、平成15年）によれば、両者の解釈の相違は生（ベルグソン）と死（ハイデガー）への哲学的態度の相違による。ハイデガーの死は先駆的決意性のもとで改めて存在へと開かれると解釈され、これが現存在の在り方とされる。つまり、死があつての生との解釈となる。一方ベルグソンにとって死は生があつての死であり、単なる個体の死として生命の躍動の通過点であるとする。現存在の意味は、さらにヴォルフ学派やカント、バウムガルテン等によって解釈は異なるが、ここではボルノウが依るハイデガーの現存在を『現象学事典』（弘文堂）より引用する。「人間は自らが存在するということを、自分自身の唯一の事柄として生きねばならぬ存在者である。現存在とはこのような存在者の「存在」を示す言葉でもある」。
- (3) ボルノウ、同書、P.18.
- (4) ボルノウ、同書、P.19.
- (5) ボルノウ、同書、P.260.
- (6) ボルノウ、同書、P.261.
- (7) バシュラールの「住まうこと」についての思索は詩人のイメージに依る。詩人がつづる「家」と「自然の厳しさ」との関係についてのバシュラールの解釈は、ハイデガーの「世界—内—存在」における「被投性」、そしてボルノウが示す世界に「投げ出されている」に通じる。それは厳しい経験によって本来の「住まうこと」へと導かれる人の本性を示している。バシュラールは「家はいつも大きな揺籃なのである」（ガストン・バシュラール『空間の詩学』、岩村行雄訳、ちくま学芸文庫、2002年、p.49）と比喻し、外界や悪意のある人（つまりその全体である世界）から守ってくれる家（物質な家、心理的な家としての存在）として「ゆりかご」と表現する。
- (8) ここでいう「安定的に」は日常性を意味する。周知のとおり六呂師高原は生活圏から遠く離れた場所に位置しており、一般的には日常から離れた空間として認知されている。六呂師高原の日常化への追求は、取組みの方向性として避けて通れぬ課題ともいえ、日常性への理解は、六呂師高原の空間形成の在り方に影響を及ぼすものと考えられる。日常性について興味深い論考がある。ハイデガーの日常性への問いから日常の意味を考究した片山氏は、祭りや旅等の非日常とされる場に対して「それらがどれほどの日常の「他の場」（余所）となりえるか」という問いを發し、「余所」を「境界の曖昧な日常という場の内部にある」と設定したうえで、「非日常の場面も、結局は日常の中に囲い込まれる」という推論を立てつつ、一方で「日常の意味に囲い込まれない可能性」への可能性も内包させ、「日常の内部に取り込まれずに日常を意味づける「他の場」として「日常の異界」と表現する（片山洋之助「存在論と日常性—ハイデガーの『存在と時間』を手がかりに—（上）」、茨木大学人文学部人文学紀要「人文科学論集」41, 2004, pp. 87-101）。この「日常の異界」は、六呂師高原についての思索に論点を与えてくれる。そもそも六呂師高原は、生活圏から乖離した非日常の場所であるとの認識が一般的である。しかしながら、「日常の異界」に照らすと、六呂師高原は高原の地理という物理条件として周辺に開かれつつエリアに閉じられている場所であり、かつ高原の風景という心象作用として我々の外に開かれつつ内に閉じられている場所でもあり、物理的にも存在論的にも無限でありながら有限という二重性が表出する。この二重性は開かれる際には日常の内であり、閉じられる際には日常の外にあり、我々の曖昧な日常性を示している。このような六呂師高原の本来性に目を向けるならば、日常性と非日常性は遠くに乖離しておらず、むしろ一致あるいは即時と見ることも可能といえる。このように見ていくと六呂師高原の日常化を空間や場所の問題として扱うことに躊躇いが生じる。むしろ行為として、すなわち空間の利用として「日常の異界」をどのように見定めるかを課題とすべきと考えられる。

- (9) 「適所性」については、ハイデガー『存在と時間』所収「第十八節 適所性と有意義性 世界の世界性」、原佑編「ハイデガー」世界の名著 74、中央公論社、1993 年（8 版）、pp.178-186 を参照し、知見を得た。ハイデガーの「適所性」あるいは「適所全体性」は次のように要約される。ハンマーは釘を打つ道具として適所性が得られるが、それは釘を打って家を固定することができるからであり、その行為は家の固定によって暴風雨から家を守るという目的があるからであり、その目的は人が住むという目的に適っているからである。つまり、ハンマーの適所性は人が住むという目的を以前より含有しているという論理である。例えば、この道具を壊れたハンマーに置き換えて考えると、この論理上では壊れたハンマーは適所性を得ないということになる。

（2019 年 4 月 26 日受理）